論文審査の結果の要旨

論文提出者　佐藤　温

佐藤温氏の「幕末の社会変革と文芸　ー菊池・大橋家の文人たちの歩みを追ってー　」は、近世後期から幕末にかけて男女４人の文人を輩出する一方、当時の社会変動とも深い関わりを持った菊池・大橋家の事跡をはじめて実証的に描き出そうとするものである。また精緻な実証を経て、幕末に文人を志向することの意義や、文人という位相が当時の社会においてどのような役割を果たし得たかなど、文学ないし思想史研究として根源的な問いを複数うち立て、前近代における学芸を俯瞰的に捉え直そうとするものである。

町人階級に属する菊池・大橋家は、19 世紀初頭に本店を置く下野国宇都宮城下から江戸表・日本橋に進出し、一代で古着商から両替業に事業転換を図り、大店として確乎たる地位を築くことに成功した。論文の中で重点的に検証される４人とは、商家佐野屋の初代当主大橋淡雅と、その実子で２代目を担う菊池教中、その教中の姉にあたる大橋巻子と、巻子の婿養子として迎え入れられた江戸市中の儒者、志士としても知られる大橋訥庵の人々である。

江戸佐野屋の暖簾の下緊密な関係を結んだ菊池・大橋家の親子、兄弟そして夫婦は、書画詩文と和歌和文という諸芸を学び行うことで精神修養をめざす一方、各自が取り組む文芸の時世における意義を自覚し、本来の職業ないし志向を保持する上で文芸が必須の手段であると認識し、表現していった点がもっとも注目に値する。従来の江戸文学ないし思想史研究では、「文人」とは日中の歴史社会に根拠を持ち、脱俗を志向するいわゆる雅文芸にのみ活動の半径を認められた存在であったが、本論における検証の結果、幕末日本において、文人の精神性を尊重する一方その立場を利用して多様な社会層との接点を持ち、文人として振る舞うことが激変する時局に対応するための処世術の一つであり、人々が公私にわたって顕示していったことが証明された。言いかえれば、本論では、高次の文化に携わることが家の存続と繁栄に寄与し、個々人にとって自身のアイデンティティを包括的に支える強力な装置として働いた模様を浮き彫りにすることができた。

序論「幕末の『文人』の姿と菊池・大橋家の人々」では、一家のあらましを述べながら、近世日本の文人について論じた先行研究を概観する。従来の研究は、文化文政期を経て、学芸への関心が広まると同時に通俗化が進み、その結果、文人といわれる人々が世俗的な傾向を強めたとして否定的に評価することに終始した。また一方では、都市でも地方でも、諸芸に通じた人々が文芸の場に集い、いわゆるサロンを持続させることで身分の枠を超えた交遊を可能とし、前近代において公共圏の形成に寄与したという社会的意義が指摘される場合もあった。先行研究の概況をふまえながら、序論では菊池・大橋家の人々を通して文芸を紐帯とした人々の交遊と、交遊の場で醸成された表現を発信することが同時期の社会に与えたその影響について、見通しを立てている。

第１部「『文人』大橋淡雅の生きた幕末」では、初代・大橋淡雅の事跡を紹介し、分析する。宇都宮の古着商佐野屋を営む菊池家に養子入りした淡雅は、江戸に分家開店し、佐野屋を大店へと急成長させる傍ら、文芸に熱心に取り組んでいった。第１章「富商大橋淡雅の文事と時局」では、淡雅の遺著から市井の一商人がたどり着いた経世志向と文事との関わりを論じる。淡雅は、渡辺崋山や立原杏所ら武家をふくむ文人たちと書画鑑定サークル

を結成するが、蛮社の獄で崋山が検挙されると、そのサークルは救出活動に軸を移し、時局への関与を自ずと深めていく。一方、同サークルが営利的な書画鑑定家集団としての側面を持つことに着目し、第２章「幕末の文人サークルと書画市場」では、その一員であった書画商安西雲煙が代々幕府御用の鑑定業者をつとめる古筆家から特権侵害によって訴訟を起こされることに至る。本章ではその事実を初めて明らかにすると同時に、淡雅が加わった鑑定サークルを全国規模の書画市場における一種の新興勢力として捉え、急速に伸展するその出現の意義を問うている。近代以前、芸術の市場がいかに成立したかを考える上で重要な指摘であり、明治以降における美術制度の考察に資益することが期待される。

第２部「菊池教中の文人意識と『澹如詩稿』では、２代目当主教中の生涯と文学を中心に論じている。第１章「『文人』になることの意味 ー菊池教中『澹如詩稿』をめぐってー 」では、教中が編集刊行した漢詩集『澹如詩稿』を通して、田園における理想の文人生活と、その実現に向けた詩人の行動を描き出している。当時、教中が佐野屋の経営改革を企てる一環として、宇都宮で新田開発を手がけている。第２章「詩人の夢見た理想郷　ー菊池教中の経世意識と『澹如詩稿』ー　」では、教中が政情不安から引き起こされる内乱や対外戦争を避けて佐野屋一統を江戸から集団移住させるための自治村を建設しようとする顛末を記す。これは、『澹如詩稿』に見える教中の文人閑居への憧れの延長線上にあって、一統の暮らす村を率いる疑似領主的な領導意識までもがうかがえる展開である。

教中が抱く危機意識は、やがて義兄大橋訥庵とともに攘夷運動に関与するまでに先鋭化するのだが、その経緯の記述と分析は第３部「大橋訥庵の攘夷運動と文芸」において詳細に行われている。第１章「『攘夷家』大橋訥庵像の形成過程」では、戦前からの訥庵に対する評価の推移を取り上げ、第２章「文人『閑居』の戦略性　ー大橋訥庵の小梅移居の背景と目的ー　」では、訥庵が企てた文人としての自己表象について考察する。攘夷言説の普及をめざす訥庵は、献策や出版を画策するも失敗し、その打開策として野に下って江戸郊外の逸人となるという周到なストーリーを用意した。読書と文人交遊にふける訥庵について、第３章「幕末の志士が読む南宋の興亡　ー大橋訥庵『陳龍川文鈔』を中心にー　」では、訥庵の書物メディアを通した攘夷論の普及と和刻本漢籍との関わりを論じる。

ところが文久２年（１８６２）１月に実行された坂下門外の変の計画に関与したなどとして、訥庵および訥庵の息子陶庵と教中は幕府によって相次いで逮捕され、数ヶ月後に釈放されるが、いずれも直後に病死するという最期を迎えている。第４部「大橋巻子『夢路の日記』に描かれた訥庵・教中の幽囚期」では、訥庵の妻で教中の姉にあたる巻子が家族の安否を憂えて記した和歌物語を精緻に調査し、解釈を試みている。第１章「志士の妻の哀傷　ー『夢路の日記』の主題をめぐってー　」では、この作品が日記文学としての虚構性のもとに事実を再構成している手法を確認する。第２章「夢路をたどる日々の裏側　ー書簡が語る大橋巻子の文久二年ー　」では、巻子が広い人的ネットワークと多額の工作金によって行った救出活動に主導的な立場で携わっていたことを明らかにする。最後に、第３章「『夢路の日記』の成立と伝播」を通して、これまで未解明であった同書の成立から流布へと至る過程を描き出している。

以上のように要約される本論文に対して、審査委員からは漢詩の訓読と読解にいくつかの誤謬が見られ、あるいは歴史史料の扱い方について更なる検討が必要という問題点があげられた。ただし、以上は、本論文が持つ優れた学問的価値を損なうものではないことも同時に確認された。よって本審査委員会は、佐藤温氏の学位請求論文が、博士（学術）の学位を授与するに相応しいものであると認定することに、全員一致で合意した。